

話し言葉における「なんというか」類の使用について

—中国語、韓国語母語話者を対象に—

林 香淑

1. はじめに

「なんというか」類¹は話し言葉において質問や自問形式として頻繁に用いられる。また間を取る、話の調子を整えるという意味で用いられる場合もある。「なんというか」類は形が様々であり、用法も一様でないため、日本語学習者には誤用や母語話者と違った使い方が見られるが、日本語教科書では質問形式以外取り上げられていないのが現状である。以下は日本語学習者の「なんというか」類の使用例である。(以後下線筆者)

- (1) やっぱり、中国の広い畑で、アメリカとカナダのように、おお、あのなんという、超大型農業をやればいいと思います。 (中国語母語話者 上級 CA03)

(1) は「なんというか」や「なんというんだっけ」、「なんといったらいいか」などと言いたいところを「なんという」と言ってしまった例である。このような誤用は中国語母語話者に特化したものでなく、韓国語母語話者および英語母語話者に現れる誤用である。日本語教育ではこれまで、埋め込み文における「か」抜き誤用については数多く研究されているものの、「なんというか」類のフィラーにおける「か」抜きについては堀口 (1985) で言及されているのみで、その使用実態は明らかにされていない。学習者の「なんというか」類の使用上の特徴を明らかにし、誤用の原因を明らかにすることは「なんというか」類の指導を考える上で重要なものと考えられる。

本稿では「なんというか」類の指導を考える前段階として、中国語および韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、インタビュー会話における「なんというか」類の使用状況を調べ、日本語母語話者の使用状況と比較しながらその使用上の特徴を明らかにしたい。

¹ 本稿では「なんというか」類を「なんというか」「なんというんでしょう」「なんていいますか」などの「なに+という」からなる関連形を含む総称として扱う。

2. 先行研究

「なんというか」類を取り上げ習得上の問題点について言及した研究は管見の限り堀口(1985)のみである。また、フィラーに関する研究が数多く存在している中で、「なんというか」類をフィラーとして扱っている論文も散見する程度である。

堀口(1985)は学習者に対する話し言葉の教育の特徴を捉えようとした研究である。堀口は言いよどみ教育の重要性を唱え、スピーチ、および対話を分析し、指導に必要な言いよどみを取り上げている。その中で、「ナントイイマスカ」「ナントイウカ」の「カ」を落としたり変形したりしやすいので、指導が必要であると述べている。また、「なんと言ったらいいか」は学習者の母語に共通する言いよどみであると指摘している。

山根(2002)では、講演の談話におけるフィラーを母音型、あいまい母音型、エート型、コーソー型、コソア型、ナンカ型、ネー型、ハイ型、マー型、モー型、ソー型に分けている。そのうちナンカ型について、「ナニ」「ナンカ(ー)」「ナンテューノ」「ドューカ」など、疑問詞を含むものを指すとし、「ナニ」「ナンテューノ」などについては、聞き手へ問いかけているのではなく、自問しているもののみ含むとしている。また、5拍以上のフィラーの役割について、時間稼ぎの意味合いが強いと述べ、その例として「ナンテューンデスカネ」が挙げられている。また、「フィラーは、話し手が談話を構成していく上で必ずといっていいほど出現する現象である」が、「あくまで話し手側の話しやすさに関するものだ」と述べている。

小池編(2003)の『応用言語学事典』で山根は、ポーズはその形態上 *unfilled pause* (UP) と *filled pause* (FP) の2種類に大別され、UPはスピーチにおける無音状態 (*silence*) を表すのに対して、FPは英語では *uh, ah, er* など、日本語では「えー、あー」などのサイレンス・フィラー (*silence fillers*) を意味するとし、これは言い淀み (*hesitation*) 現象の一種で、無音状態を埋めるという意味でサイレンス・フィラーと呼ばれていると述べている。また、山根は、話す内容がうまくまとまっていない時などにサイレンス・フィラーが多く見られるが、その使用目的は、話を継続したいという意図を聞き手に示すことにあるとし、サイレンス・フィラーは話者の伝えたい意味内容に直接関与しないが、話者の微妙な心理状態を反映していると述べている。

学習者のフィラーに関する研究は様々でありながら、主に「あの一」「その一」「この一」「こう」「まあ」「なんか」「えーと」「えー」などに限られている。堀口(1985)は「なんというか」類について触れてはいるが、「なんというか」類の具体的な使用状況まで明らかにされていない。本稿では、学習者の「なんというか」類の使用実態を

浮き彫りにしたい。

3. 調査

3.1 調査目的

本調査では以下の2点を明らかにすることを目的とする。

- ①中国語、韓国語を母語とする日本語学習者のインタビュー会話における「なんというか」類の使用状況
- ②「なんというか」類の誤用の種類

3.2 調査概要

本稿では調査データとして「KY コーパス」を用いた。それは「なんというか」類は言いよどんだり、言葉を探るときに使う表現であるため、インタビューデータに多く表れると考えたためである。「KY コーパス」は OPI²形式を用いたインタビュー会話データである。本稿では「KY コーパス」の中国語、韓国語を母語とする日本語学習者各 30 人分、合計 60 人分のデータを用いた。また、参考のために英語母語話者 30 人分のデータについても調査を行った。それから、学習者の「なんというか」類の使用上の特徴を探るための基準となる日本語母語話者のデータとの比較が必要であると考え、日本語母語話者の使用状況についても調査を行った。日本語母語話者のデータとしては、北九州市立大学で開発された「インタビュー形式による日本語会話データベース」(<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>) の 54 人分のデータを用いた。

上記の二つのコーパスはすべて OPI 形式を用いたデータであり、インタビューの構成および手順において共通しているため、インタビュー内容に関わらず一括して考察することにした。

日本語学習者のデータの内訳は母語別に、それぞれ初級が 5 人、中級が 10 人、上級が 10 人、超級が 5 人である。また、「KY コーパス」の上級において、その下位分類の「上級」および「上級の上」において異なる特徴が見られたため分けて考察することにする。以降初級、中級、上級、上上級、超級に分けて考察する。

調査方法としては、コーパスのテキストから発話されたすべての「なんというか」類を目で追いながらピックアップした。「なんというか」類には質問とフィラーの用法

² OPI は「Oral Proficiency Interview」の略語で、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages-米国外国語教育協会) によって開発された、外国語の発話能力を測定するためのテストのこと。(山内 (2009))

があるが、本調査ではまずすべての「なんというか」類を抜き出した。それから、質問とフィラーの用法に分け考察を行った。本稿では小池編(2003)の「サイレンス・フィラー」をフィラーと定義し、「なんというか」類の一機能として扱う。なお、自問はフィラーの用法として扱う。「なんというか」類においての質問と自問の区別については、音声資料が入手できないものがあるため、以下のような基準を設けた。①聞き手に問いかけているものおよび埋め込み疑問節は質問として扱い、それ以外のものについては自問と見なす。②話を中断し、相手の回答を求めるような特徴がある場合には質問と見なし、それ以外は自問と見なす。

考察対象は、学習者と日本語母語話者の「なんというか」類の出現形式、出現回数、および学習者の誤用である。誤用分析方法としては、まず形態的な誤用を選び出し、形態上の特徴から誤用の原因を考察した。中級学習者には「なにがいうか」「なにがというか」など、「なんというか」の語形成に問題がある誤用が出現しているが、これらを形態上の誤用と判断した。また、「なんというか」類の誤用には「なんという」という「か」が抜けている形式の誤用がある。この種の誤用は埋め込み疑問節における誤用とフィラー用法における誤用がある。これらのものに関しては文脈による判断を行ったうえ、その誤用の原因について考察を行った。質問かフィラーかの判断および誤用の判断に関しては、日本語教育関係の日本語母語話者一人と筆者の判断によるものである。

4. 調査結果と考察

4.1 母語話者との比較

4.1.1 「なんと」系および「なんて」系の使用状況

ここでは「なんと」系および「なんて」系³の使用において母語話者と非母語話者を比較する。「なんというか」類は形態上の特徴から大きく「なんて」系と「なんと」系で分類することができる。

日本語母語話者および、学習者の「なんというか」類の使用状況を表1に示す(誤用も含む)。表1を参考に、母語話者の「なんというか」類の使用上の特徴を見ると、インタビュー会話において「なんと」系の使用より「なんて」系の使用が圧倒的に多いことが分かる。

³ 本稿では「なんていうか」「なんていいますか」「なんていうんでしょう」など、「なんて」で「いう」につながるものは「なんというか」類の「なんて」系と称し、「なんというか」「なんといいますか」「なんというんですか」など、「なんと」で「いう」につながるものは「なんというか」類の「なんと」系と呼ぶことにする。「なんちゅうか」「なんっか」など崩した形は「なんて」系として数える。

表1 母語話者別の「なんと」系と「なんて」系の使用状況 (回)

	「なんと」系	「なんて」系	合計
日本語母語話者 (54 人)	5 (7%)	67 (93%)	72
中国語母語話者 (30 人)	25 (42%)	34 (58%)	59
韓国語母語話者 (30 人)	29 (56%)	23 (44%)	52
英語母語話者 (30 人)	15 (21%)	55 (79%)	70

しかし、日本語学習者においては「なんと」系の使用が目立つ。韓国語母語話者においては「なんと」系が「なんて」系を上回り、中国語母語話者においても「なんと」系と「なんて」系の使用が拮抗している。「なんと」系の使用が一番少ない英語母語話者においても、日本語母語話者と比べると「なんと」系の使用が目立つ。

日本語学習者において「なんと」系の使用が目立つ原因の一つとして学習者が書き言葉の「という」の形を先に学習するためと考えられるが、これについては立証の必要がある。また、各母語話者におけるインタビューに対するフォーマリティへの認識の違いが考えられる。中国語母語話者には書き言葉がフォーマルであるという認識があるため、インタビューという改まり度の高い場面に応じて書き言葉の「なんと」系を多用した可能性が考えられるが、これについても立証の必要がある。

4.1.2 「なんとというか」類の丁寧表現の使用状況

「なんとというか」類の丁寧表現⁴の使用状況を表2に示す。調査結果から日本語母語話者は「なんとというか」の丁寧表現として「～んでしょう(か)」が多用されているのに対し、学習者は「ます、です」形が多用されていることがわかった。「～んでしょう(か)」形の使用においては、韓国語母語話者が4例、英語母語話者が1例あり、中国語母語話者においては1例も観察されなかった。ちなみに、韓国語母語話者の4例は超級学習者1人による使用例である。

また、丁寧表現を伴わない「なんとというか」「なんていうの」「なんていうんだろう」などの「なんとというか」類の普通形において、母語話者は28%の使用が認められたの

⁴ 「なんとというか」類の丁寧表現には「なんとというんでしょう(か)」など「～んでしょう(か)」がついているものと「なんといいですか」「なんとというんですか」など「～ですか、～ますか」がついているものがある。これらをそれぞれ「なんとというか」類の「～でしょうか」形と「です、ます」形とし、「なんとというか」「なんとというんだろう」など丁寧形式がついていないものに関しては「なんとというか」類の普通形と呼ぶ。

に対し、中国語母語話者は51%、韓国語母語話者は50%、英語母語話者は70%という高い使用率が認められた。以下の表2は「なんというか」類の丁寧表現の使用状況を示したものである。

表2 「なんというか」類の丁寧表現の使用状況(回)

	丁寧表現		普通形	合計
	「～でしょう(か)」形	「です、ます」形		
日本語母語話者	19 (26%)	33 (46%)	20 (28%)	72
中国語母語話者	0 (0%)	29 (49%)	30 (51%)	59
韓国語母語話者	4 (8%)	22 (42%)	26 (50%)	52
英語母語話者	1 (1%)	20 (29%)	49 (70%)	70

さらに、中国語母語話者および英語母語話者においては改まったインタビュー会話の中で「なんつんですか」「なんてんですか」など、日本語として不適格な表現の使用が観察された。「なんつんですか」「なんてんですか」は「です」が付いているということで丁寧表現ではあるが、「ていう」を「つん」「てん」などと崩した時点で改まり度は落ちる。

以上のことから学習者には、「なんというか」類の丁寧表現である「～でしょう(か)」形の欠如および、インタビューという改まった場面への認識の欠如が考えられる。

4.2 「なんというか」類のレベル別使用頻度

各レベルにおける「なんというか」類の母語別使用状況を図1に示す(誤用も含む)。「なんというか」類の使用はレベルが上がるにつれ使用数が多くなっているが、一人当たりの平均使用頻度は、中国語話者が上級で4.7回と一番高く、上上級から徐々に減っていき、超級では平均使用頻度が2.8回となっている。それに対し、韓国語話者と英語話者においては上級では中級での使用とあまり変わらず、上上級では使用頻度がそれぞれ4.8回と6回とで一番高い。そして、超級ではそれぞれ3回と3.8回に減っている。

また、図1から「なんというか」類は初級では使用されず、中級から使用が認められていることが分かる。「なんというか」類の質問形式は教科書において初級の段階で導入されるが、埋め込み疑問節は定着するのに時間がかかる。そのため複文構造にな

れた中級の段階から使用が認められたのであろう。「なんというか」類の使用は中級から観察され、誤用を含め上級および上上級において盛んに使用されている。そして、習得の進んだ超級段階ではその使用が減っている。

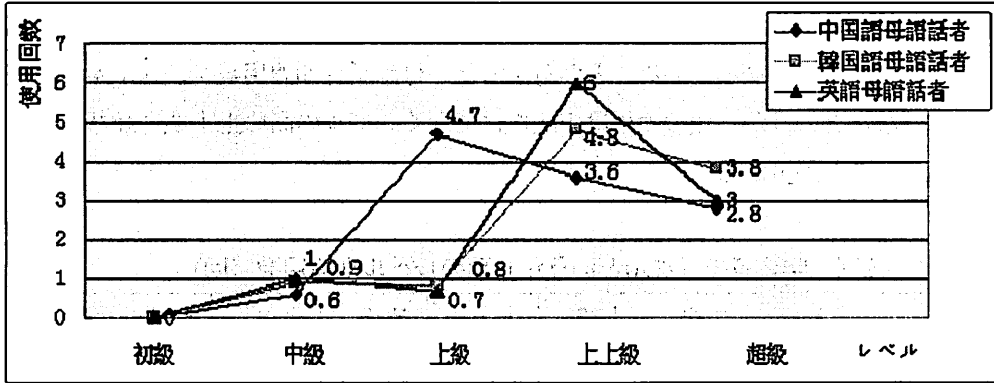


図1 「なんというか」類のレベル別平均使用頻度 (回)

4.3 「なんというか」類の個人別使用状況

表3は「なんというか」類の使用における使用回数別人数を示したものである。その使用頻度は個人によって異なることが一目瞭然である。

前節で言及したように「なんというか」類は初級では使用が認められない。しかし、母語話者に近い上上級や超級においても使用が認められない学習者が見受けられる。特に、「なんというか」類のバリエーションが一番豊富な上上級においては最低使用数が0回、最高使用数が18回とその使用に個人差が激しい。これは母語によらず中国語、韓国語、英語を母語とする学習者に共通に現れる現象である。そして、日本語母語話者において「なんというか」類の個人別使用数を調べたところ、54人中29人が0回で、一番多く使用した発話者においては11回とその使用にも個人差があることが分かった。

表3 「なんというか」類の使用における使用回数別人数

使用回数 (回)	0	1	2	3	4	5	6	7	9	10	14	15	16	18
使用人数 (人)	48	12	7	8	3	3	1	1	2	1	1	1	1	1

4.4 「なんというか」類の誤用

中国語、韓国語、英語母語話者における「なんというか」類の誤用は、それぞれ全体使用数の約27%、4%、17%を占めている。この数値から韓国語母語話者は4%と誤用率が一番低いものの、「なんというか」類の誤用は母語を問わずに共通して現れるものであることが分かる。中国語母語話者においては「なんというか」類の全体使用数の3割近くが誤用となっていることが分かった。母語話者別誤用数を表4に示す。表4から「なんというか」類の誤用は中級だけでなくレベルの高い上上級や超級になっても現れることが分かる。

表4 学習者の「なんというか」類のレベル別誤用数(回)

	初級	中級	上級	上上級	超級	合計	全体使用数
中国語話者	0	5	10	0	1	16	59
韓国語話者	0	1	0	1	0	2	52
英語話者	0	3	0	7	2	12	70

4.4.1 「なんというか」類の誤用のパターン

誤用のパターンを見てみると大きく二つに分けられる。一つは初歩的な誤用で、「なんというか」の語形成⁵に問題があるものである。初歩的な誤用には埋め込み疑問節「なんというかわかりません」における誤用も含む。(2)(3)はその例である。誤用のもう一つのパターンとしては「なんというか」類のフィルター用法での「か」が抜けている誤用である。この点に関しては次節で述べることにする。

(2) んーんー、全然違います、日本は全部、暖房、(えー)暖房で、暖めて、(んー)中国は、ナンチー、と思います、日本は今何が、日本語で、なにが、とい
います、わかりません。(中国語母語話者 CIM04 中級)

(3) あの、父はあのう、中国の、あの computer の会社の、勤めています、(はい)母は、あの政府、政府の会社、ええ、日本語、なんという、よくわからないです
ね。(中国語母語話者 CIM02 中級)

⁵ ここでは「なんというか」の一つのまとまりを形成することを語形成と呼ぶ。

(2) は「なんというか」、「なんていうか」などとしたいところだが、語形成に問題があるため不完全な形式になってしまった例である。(3) は「日本語でなんというかよくわからないですね」とすべきところである。(3) のような埋め込み疑問節において不定の「か」は必要不可欠である。これらの誤用は主に中級学習者に観察され、特に中国語母語話者に多く観察された。

4.4.2 助詞「か」が抜けた「なんという」の形の誤用

助詞「か」が抜けた「なんという」という形の誤用は、前節で述べた埋め込み疑問節における誤用以外に、フィラー用法における誤用がある。この種の誤用は中級から超級にかけて現れる誤用で、学習者の母語を問わず、中国語母語話者、韓国語母語話者および英語母語話者において共通して観察された。この結果は堀口（1985）の学習者は『ナントイイマスカ』『ナントイウカ』の『カ』を落としたり変形したりしやすい」という結果と一致している。その例を以下に示す。

(4) それ、全部終わったら、スリークッションという、〈うん〉あの一、はた、あのテーブルみたいなですねえ、何という、はた、とか、あ、四角のですね。

(韓国語母語話者 KIH01 中級)

(5) もし4年間の時間あれば、〈うん〉日本語の方に、あの、努めて、上達になりたいですね、〈はあ〉先生はあの、なんという、今教師になっていますよね。

(中国語母語話者 CA02 上級)

(6) そして日本の会社の、なんという、残業のことが多い〈ふんふん〉とか、えっなんでえとか、

(英語母語話者 EAH08 上上級)

(7) 横断歩道がありますよね、〈うん〉横断歩道があるところは必ず、こる、あの車が止まって、〈うん〉あのう、なんていう一、あ一、先に、〈うん〉こうわたってくれるんですけども

(中国語母語話者 CS05 超級)

(4) (5) (6) (7) はすべて「なんというか」としたいところを「なんという」としてしまっただけの例である。興味深いのはこれらの誤用が正用と併用されていることである。以下の (8) はその一例である。

- (8) あの、影響、なんて、え、得るっていうか、なんていう、なんていうかな、
なんていえばいいですかね、なんていう、アメリカの本社にいても、まあ、ん
一、なん、じゅ、何千一、(後略) (英語母語話者 EAH02 上上級)

上記のことから学習者は「なんという」および「なんというか」を、「なんというか」類のフィラーの形として認識していることが言えよう。これらの誤用についてはいくつかの原因が考えられる。例えば母語の影響、日本語の構文上の特徴から来る混乱などが考えられるが、次にその原因について考察する。

4.5 「なんという」という形の誤用の原因

なぜ日本語学習者には「なんというか」類を習得する際に「なんという」という形の誤用を産出してしまうのだろうか。この節ではその原因を日本語の構文上の特徴から考えてみたい。

4.5.1 「なんというか」類の構文上の特徴

「なんというか」類は構文上の特徴から主節疑問文における「なんというか」類、埋め込み疑問節における「なんというか」類およびフィラーにおける「なんというか」類の三つに分類することができる。

主節疑問文においては「なんといいますか」の普通体⁶は一般的に文末の助詞「か」が省かれ、「なんという？」になる。しかし、埋め込み疑問節では「なんというかわからない」などとなり、ここでは「か」が必要となる。また、フィラーの普通形においては「なんというか」となり「か」が必要となる。しかし、フィラーの「でしょう」形においては「なんというんでしょう」「なんというんでしょうか」となり、「か」があってもなくても成立する。

「なんというか」類は用法や形式によって助詞「か」が必要であったり、必要でなかったりするため、学習者が運用する際混乱を引き起こしやすい。

⁶丁寧体と普通体—丁寧体と普通体というのは、文章や談話の全体に、述語に「です」「ます」のついた形の文と、「です」「ます」のつかない形の文のどちらを使うかという選択である(『新版日本語教育事典』参照)。

⁷普通体の疑問文では一般的に文末の助詞「か」が省かれ「飲む(↑)」のような上昇イントネーションで発話される(『みんなの日本語初級I 教え方の手引き』参照)。

4.5.2 学習者における「なんという」という形の誤用の実態

初級や中級学習者には以下のような誤用が観察された。

- (9) あの、バスケットボールは、あの丸いの、〈ええ、丸い〉日本語、何という分らないです。 (中国語母語話者 CIH02 中級)
- (10) あの、父はあのう、中国の、あの computer の会社の、勤めています、〈はい〉母は、あの政府、政府の会社、ええ、日本語、なんという、よくわからないですね。 (中国語母語話者 CIM02 中級) (3) の再掲

(9) (10) は「なんというか」、「なんといったらいいか」などとすべきところを「なんという」としてしまった埋め込み疑問節における誤用例である。日本語で質問の「なんといえますか」の普通体は「なんという？」である。しかし、埋め込み疑問節においては「なんというかわかりません」という形であり、助詞「か」は必要不可欠である。しかし、習得初期段階におかれている中級学習者は、主節疑問文の普通体と埋め込み疑問節における「なんというか」類の構造を混同し、誤用を産出したと思われる。

一方、(11) は「なんというか」を「なんという」としてしまったフィラー形式の誤用例である。前節で述べたようにこの種の誤用は中級から超級にかけて現れる誤用で、レベルや母語を問わず現れる誤用である。

- (11) もし4年間の時間あれば、〈うん〉日本語の方に、あの、努めて、上達になりたいですね、〈はあ〉先生はあの、なんという、今教師になっていますよね。 (中国語母語話者 CA02 上級) (5) の再掲

「なんというか」類のフィラーにおいて、「ます」形は「なんといえますか」であり、その普通形は「なんというか」になる。このときにも助詞「か」は必要不可欠である。上級以上の学習者においては、主節疑問文および「なんというか」類の埋め込み節での誤用が観察されていない。そのため、学習者のフィラーにおける「か」抜き誤用は、主節疑問文の普通体とフィラーの普通形の混同と考えられる。また、「なんというか」類のフィラーには「なんというんでしょう (か)」など、「でしょう (か)」を伴う表現がある。「なんというんでしょう (か)」は「なんといえますか」と違って、フ

イラーの場合「か」があってもなくても成立する。このような「か」があるものやないものの混在がさらに学習者を混乱させ、フィラーの「か」抜きの「なんという」という形の誤用を引き起こしたと考えられる。

一般的に学習者は主節疑問文を最初に学習し、次に埋め込み疑問節を学習する。「なんというか」類のフィラーにおいては教科書では取り上げられていない。フィラーの誤用は超級学習者においても観察されているが、フィラーは意味理解にかかわらないため訂正される機会が少なく、化石化した可能性が高いと考えられる。

4.5.3 誤用と母語との関係

中国語を母語とする学習者における「なんという」という形の誤用に関しては上記の原因以外に母語の影響も考えられる。中国語で質問の「なんというか」類は「怎么(どう)说(いう)」「怎么(どう)说(いう)呢」「怎么(どう)说(いう)呀」「怎么(どう)说好(言ったらいい)呢」などと翻訳できる。ここでは便宜上「呢」を用いて説明することにする。ここでの「呢」は「語気助詞」であり、大雑把に言うと日本語の「ね」に相当するものである。しかし、日本語の修飾関係の「なんというかわかりません」は中国語で「不知道(分からない) 怎么(どう)说(いう)」であり、このときは「呢」がつかない。また、フィラーの「なんというか」は「怎么(どう)说(いう)呢」あるいは「怎么(どう)说(いう)」であり、「呢」があってもなくてもいい。

正確に言うと質問の「なんというか」の「か」は終助詞であり、中国語の「呢」に相当するものではない。しかし、学習者は語気助詞や終助詞など正確に区別せず、感覚的に「呢」や「か」を付属的なものと捉えた可能性がある。習得段階にある中級学習者は、母語との混同および日本語の「なんというか」の構文上の特徴をきちんと把握できていないため埋め込み節内でも「なんという」という形を使用してしまったと考えられる。また、中国語を母語とする日本語学習者は母語の影響で、フィラーの「なんという」を誤用ではなく「なんというか」の「か」の省略だと考えている可能性が高い。この点に関しては母語話者十数人に口頭で確認しているが、今後更なる検証が必要である。

韓国語の「なんというか」類の構文上の特徴は中国語や日本語のように単純に終助詞の「か」や「呢」の有無で区別するものではない。韓国語においては主に「なんというか」類の「いうか」の部分の接続語尾が変化する形である。主節疑問文の典型的な形である「뭐라고(なんと) 합니까(いいですか)」の普通体は「뭐라고(なんと)

하니 (いう)」「뭐라고 (なんと) 해 (いう)」であり、埋め込み疑問節においては「뭐라고 (なんと) 하는지 (いうか) 모릅니다 (모르겠습니다) (分かりません)」「뭐라고 (なんと) 할지 (いったらいいか) 모릅니다 (分かりません)」「뭐라고 (なんと) 해야할지 (いったらいいか) 모릅니다 (分かりません)」である。フィラーにおいては「뭐라고 (なんと) 하지 (요) (いうか (いいですか))」「뭐라고 (なんと) 할까 (요) (いうか (いうんでしょうか))」「뭐랄까(요) (なんつーか (なんつーんですか))」などであり接続語尾が塊として変化する形となっている。韓国語の「なんというか」類は形が豊富で、日本語の「なんというか」類に単純に対応させることは難しい。そのため、学習者の誤用と母語を簡単に結びつけることはできない。これについても更なる研究が必要であろう。

5. まとめ

本稿では日本語学習者のインタビュー会話における「なんというか」類の使用状況を考察し、「なんというか」類の使用上の特徴および誤用の種類を明らかにすることを試みた。その結果以下のような五つの特徴を見出した。

①「なんというか」類は初級では使用されず、中級から使用が認められレベルが上がるにつれ使用数が多くなっているが、その使用には個人差が激しい。

②インタビュー会話において母語話者は「なんと」系より「なんて」系の使用が圧倒的に高い。しかし、日本語学習者においては「なんと」系の使用が目立つ。

③日本語母語話者には「なんというか」の丁寧表現として「～んでしょう (か)」が多用されているのに対し、学習者には「ます、です」形が多用されている。

④「なんというか」類の語形成に問題があるものと埋め込み疑問節における誤用においては、主に中級学習者に多く観察された。また、「なんというか」類のフィラー用法における「か」抜きの誤用は、超級になっても現れる誤用である。

⑤「なんというか」類の習得において、最初に習得されるのは主節疑問文であり、次に習得されるのは埋め込み疑問節であり、最後に習得されるのはフィラー形式である。

本稿では「なんというか」類の使用実態を調べることにより、日本語の構文上の特徴から「なんというか」類の誤用の種類を明らかにし、その原因についての考察を試みたが、学習者の母語との関係まで詳しく考察を行うことができなかった。また、「なんというか」類の会話における意味機能および各母語話者のフォーマリティに対する認識についても深く考察することができなかった。さらに、学習者には「なんという

か」類の「～んでしょうか」の丁寧形式の欠如が考えられるが、これについても更なる研究が必要であろう。

参考文献：

北野浩章(2007)『『ていうか』『ですか』の文法論』『言語』36(3) 大修館書店 pp. 70-76

小池生夫編(2003)『応用言語学事典』研究社 p. 490

小出慶一(2009)「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究—多機能化、
フィラー、フィラー化—」『日本アジア研究』第6号 pp. 1-36

蔡嘉綾(2007)「日本語学習者の会話におけるフィラーの研究」東北大学高等教育開
発推進センター紀要(2) pp. 311-314

定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構：心的操作標識『え
えと』と『あの(ー)』』『言語研究』第108号 pp. 74-92

佐藤有希子(2005)「日本語母語話者の雑談における『うん』と『そう』—フィラー
として用いられる場合—」『国際開発研究フォーラム』29

砂岡和子(他)(2007)「フィラーに対する中国語と日本語の印象評価比較」『電子情
報通信学会技術研究報告』TL, 思考と言語107(323) pp. 19-24

スリーエーネットワーク編(2000)『みんなの日本語 初級I 教え方の手引き』ス
リーエーネットワーク p. 197

寺井妃呂美(2000)「談話における『ていうか』の機能」『日本と中国ことばの梯 佐
治圭三教授古希記念論文集』くろしお出版 pp. 175-186

日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店 pp. 180-181、 p. 188、
p. 191

堀口純子(1985)「話しことばに迫る」『応用言語学講座1 日本語の教育』明治書
院

山内博之(2009)『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

山根智恵(2002)『日本語談話におけるフィラー』くろしお出版

(りん こうしゅく・首都大学東京大学院生)